
スパイの最期

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スパイの最期

【Nコード】

N8779H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

凄腕のスパイマトリョーシカ。彼女は敵国に潜入しそのうえで破壊工作を成功させる。その手段はあまりにも冷酷であり仇として暗殺されてしまう。冷酷なスパイは本当に人間の心を持っていなかったのか。ハードボイルドです。

第一章

スパイの最期

「マトリョーシカⅡラムラ少佐」

「はい」

一人のブロンドの美女が暗い部屋の中で言葉を受けていた。

「貴官の次の任務はだ」

「それは一体何でしょうか」

「カラニ共和国に潜入するのだ」

「カラニにですね」

「あの国は今現在大量破壊兵器を開発しているという情報が入っているのは知っているな」

「はい」

その言葉に応えるマトリョーシカだった。

「それは私も聞いています」

「その大量破壊兵器が何かだが」

「核兵器ではないのですか？」

こう言葉に問うマトリョーシカだった。

「それは」

「その可能性が極めて高い。それはカラニ共和国の原子力発電所で開発されているという」

「原子力発電所にですか」

「貴官にはそれを確かめてもらいたい」

言葉はまた彼に告げてきた。

「原子力発電所の中で研究及び開発を行っているのが事実ならば」

「その時は」

「破壊するのだ」

今度は一言だった。

「いいな。破壊するのだ」

「原子力発電所ごとですか」

「そうだ。その為に手段は選ばなくともよい」

言葉に厳しさ、いや冷徹さがはつきりと宿った。

「わかったな」

「わかりました。それでは」

マトリョーシカは敬礼して言葉に応えた。数日後変装した彼女は大使館から密かにカラニ共和国に潜入した。これに気付いたのは大使館のごく限られた人間だけだった。知っているのもだ。

「カラニ共和国は密かに我が国を敵視しているがだ」

「はい」

初老の男が心配し不安になっている顔で変装している彼女に声をかけていた。今の彼女は眼鏡をかけ髪の色を赤く染めている。そして目はカラーコンタクトで青から黒にしている。メイクも工夫して完全に別人になっている。スーツを着る彼女はそうとしか見えなかった。

「だからこそ大量破壊兵器、とりわけ核兵器の所有を許してはならないが」

「その通りです」

「しかし」

男はさらに曇った顔で言うのだった。

「それでも原子力発電所を破壊するなどとは」

「我が国にもこの大使館にも被害は及びませんが」

マトリョーシカは無機質そのものの声で彼に告げた。

「では問題ないではありませんか」

「それはいいのだが原発の周りにいる人達がな」

彼が心配するのはこのことだった。

「恐ろしい被害を受けるが」

「全ては我が国の安全保障の為です」

だがマトリョーシカはここでも無機質そのものの声で答えた。

「それに敵国です。何ら気にすることはありません」

「何らか」

「犠牲はつきものです」

こうも言うのだった。今の言葉は言い切りだった。

「敵国の市民がそれならばやはり気にすることはありません」

「そういうものか。それでいいのか」

「いいのです。では閣下」

男を閣下と呼んだ。どうやら彼が大使らしい。その大使に対して言うのだった。

「今より作戦に移ります」

「わかった」

大使は止むを得ないといった顔で彼女の言葉に応えた。そうして彼女の返礼に返す。だがその顔は浮かないものであり続けた。

大使館を出て作戦に向かう彼女を見送ってから彼は自室に戻った。だがそこに既にいた自分の秘書に対して言うのであった。

「あれでいいのか」

「いいといいますと」

「ラムカ中尉のことだ」

彼女のことであるというのである。

「あれでいいのだろうか」

「作戦ですし我が国の為ですし」

秘書官は何でもないといった口調であった。

「仕方ないのでは」

「本当にそう思うのか？」

だが大使はいぶかしむ、しかも真顔でその秘書官に問うのだった。

「君は。本当に」

「ですから任務ですから。彼女の」

「ではこれからの発言は私は聞かない」

ところが大使はそれでもこう言ってきたのだった。

第二章

「独り言だ。そして私は何も覚えていない」

「覚えていないのですか」

「私も何を言ってもそれは残らないし君も残らない」

あえてこう言うのだった。

「それでどうだ」

「では私も覚えません」

すると秘書官もこう返してきたのだった。

「これからの言葉は」

「そうか」

「私も独り言を言いました」

彼も大使と同じような言葉を出してきた。

「その独り言ですが」

「うむ」

「あまりにも人間味に欠けます」

これが秘書官のその独り言だった。

「そして非道だと思います。独り言ですが」

「私は聞いていない」

大使はそういうことにするのだった。

「だが。私も思う」

彼もまたその独り言を言う。独り言なので秘書官は応えない。

「任務とはいえ。彼女のやることはな。賛成できない」

彼等は納得していなかった。彼女のその冷たさに。だが彼女は作戦行動に入った。まずは科学者という偽の経歴によりある大学に入るのだった。

その大学はごく普通の大学だった。理学部や工学部があるだけの。彼女はそこに入りごく普通のキャンパスにいる研究員となった。こまでは普通だった。

だがここで彼女は。一人の女性と接触した。それは彼女と同じ研究員だった。

「そう。マリーネⅡギューネワルトね」

「ええ、そうよ」

マトリョーシカはにこりと笑ってその研究員に答えた。その研究員は赤い髪に緑の目を持つ美しい女だった。その赤い髪を長く伸ばし顔立ちはまるで人形の様に整っている。

「この大学の研究員としてね。来たのよ」

「そう。私はずっとここににいるけれど」

その赤い髪の美女はこう言うのだった。

「ずっとね」

「というと大学生の時からここにいるのね」

「そうよ。ずっとね」

また答える美女だった。二人は今無機質な研究室にいる。そこにはコンピュータや様々なデータが書かれた資料が山のようにある。その中で朗らかに話しているのだった。

「ここにいるのよ」

「そう。じゃあこの大学のことも詳しいのね」

「それこそあれよ」

研究員はまた答えるのだった。

「倉庫の奥まで知ってるわ」

「ふふふ、本当に何処までも知ってるのね」

「そうよ。それで私の名前はね」

彼女は自分から名乗ってきたのだった。

「クリスタっていうのよ」

「クリスタね」

「そうよ。クリスタⅡハイドリット」

それが自分の名前だというのである。

「覚えておいてね」

「わかったわ。じゃあクリスタ」

彼女の名前を呼んでみせたのだった。親しげに。

「これから宜しくね」

「ええ」

こうしてマトリョーシカはクリスタと友人になった。二人の交流は日に日に深まっていつているように見えた。マトリョーシカはほぼ毎日のようにクリスタと食事を共にしそのうえで明るい日々を過ごしていた。彼女は完全に研究員になりきっていた。

その中で彼女はクリスタから聞いたのだった。あることを。

「そう。貴女の婚約者がそこにいるのね」

「ええ、そうよ」

大学のキャンパスの中だった。二人で並んでベンチに座りそのうえで話していた。周りには木々や草があり大学の建物も見える。美しいキャンパスである。

「そこでね。務めているの」

「そう。原子力発電所だね」

こう語るクリスタだった。

「働いているのよ」

「その人もこの大学の卒業者なのかしら」

「そうよヴァーグナー教授の助手だね」

このことも話すクリスタだった。

「優秀だったので原子力発電所の方からスカウトが来て」

「それで今はそこにいるの」

「そういうことなの。もうすぐなのよ」

また言うクリスタだった。穏やかな笑みと共に。

第三章

「私達結婚するのよ」

「そう。おめでとう」

マトリヨーシカはそれを聞いて心からの笑顔をしてみせた。

「結婚するのね」

「そうよ。その式の時にはマリーネも呼んであげるから」

「有り難う」

今度は礼を言ってみせるのだった。

「それじゃあその時はね」

「楽しみにしておいて」

こんな話をするのだった。それから数日後マリーネ、実はマトリヨーシカはヴァーグナー教授の研究室や彼が関わっている施設に潜入しそのデータを全て複製した。しかしそれは隠して研究員のふりを続けた。その中で彼女はまたクリスタと話をするのだった。

「貴女も原子力発電所に行くことがあるのね」

「そうよ」

今度は大学の食堂で話をしていた。修道院の中を思わせる何処が厳かな雰囲気の漂う部屋の中で話す二人だった。

「時々だけれどね」

「婚約者に会いに？」

「そうなの。私がね」

ここで照れ臭そうに笑うクリスタだった。

「お弁当を作って持って行くのよ」

「あら、おのろけかしら」

マトリヨーシカはソーセージを食べながら彼女に言った。二人は同じソーセージにザワークラフト、それにジャガイモを茹でてクリームをかけたものと黒パンを食べていた。飲みものはビールである。この国の伝統料理を楽しく食べているのであった。そのうえで話を

していた。

「それって」

「そうかも」

笑ってそれを否定もしないクリスタだった。

「やっぱりね。私あの人が好きだから」

「わかるわ。本当に好きなのはね」

マトリョーシカも微笑んでみせて彼女の言葉に応えた。

「それでそのお弁当だけね」

「ええ」

「いつも作っているのかしら」

尋ねるところで目の奥が光ったがクリスタはそのことに全く気付いてはいなかった。

「それは」

「時々ね」

のろけたような顔で答えるクリスタだった。

「作ってるわ。時々なのが残念だけれど」

「そうなの。時々ね」

「あの人当直が一週間後だから」

原子力発電所の当直のことである。彼女にはすぐにわかった。

「その時に作ってあげて行くつもりなのよ」

「わかったわ。一週間後ね」

「ええ。一週間後」

何も知らないクリスタは無邪気に答えた。

「一週間後お弁当を持って行くわ」

「わかったわ」

マトリョーシカもそれだけという様子で応えた。

「じゃあその時私もね」

「私も？」

「そのお弁当見せてもらいたいなって思ってるのよ」
にこやかな笑みを作って述べるのだった。

「そのお弁当。いいかしら」

「いいわよ」

やはり何も知らないクリスタは疑うことなく応えるのだった。

「私が腕によりをかけたお弁当。見せてあげるわね」

「楽しみにしてるから」

マトリョーシカは本物に見える純粋な笑顔を作ってみせた。

「その時をね」

「是非ね」

この日は終始笑顔を作っていたマトリョーシカだった。だがその深夜密かに街の高層ビルの屋上で黒い服の男と接触し話をするのだった。

「もうすぐよ」

「もうすぐか」

「ええ、原子力発電所を爆破できるわ」

夜の闇の中でこう彼に告げていた。

「もうすぐね」

「爆弾は用意してあるのか」

「それはもう最初の段階でね」

用意してあるというのである。

「小型のね。けれど威力は抜群の」

「最新型のその爆弾か」

「そうよ。それを使うわ」

こども男に答えるのだった。

第四章

「それでやるから」

「わかった」

男はマトリョーシカのその言葉に頷く。彼の表情は全く見えない。マトリョーシカにしてもその表情は全く変えずまさに仮面のそれであった。

「では頼むな」

「ええ。これであの原子力発電所は爆破されて」

「核兵器開発は大きく頓挫する」

「そしてその間に」

マトリョーシカは言葉が続けさせていく。

「私達の開発はね」

「大きく進展する。保有も間も無くだ」

「国際社会はどう言うかしら」

「気にすることはない」

男の言葉はかなり強気なものだった。

「そんなことはな。ロビー活動で黙らせる」

「いつものやり方ね」

「各国にいる同胞が味方だ」

どうやらこの国は世界各地に同胞がいるらしい。それもかなり力のある。

「何かあれば資金援助だけでなく」

「マスメディアも押さえているしね」

「怖いものは何もない」

こうマトリョーシカに言うのだった。

「対外的にはな」

「それが何よりも心強いわ」

マトリョーシカは男の言葉を聞いて満足したように述べた。

「同胞達の協力がね」

「我が民族は国を失うわけにはいかない」

男の言葉がまた険しいものになっていた。

「決してな」

「その通りよ。だからこそ私も手段は選んでいないわ」

言葉は何かを吹っ切るかのようにだった。妙な強さがそこにはあった。

「何があってもね。相手が誰であろうと」

「それでこそだ」

男は今のマトリョーシカの言葉を聞いて安心したように告げてきた。

「それでこそ我が国最高の工作員だ」

「同時に諜報員でもあるわ」

所謂スパイであるということだ。彼女はまさしくスパイなのだ。

「それは覚えていてくれるわね」

「覚えておこう。それではだ」

「ええ。もうすぐよ」

また言うマトリョーシカだった。

「もうすぐ全てのカタがつくから」

「待っているぞ」

こうしたやり取りが行われた。それから一週間後マトリョーシカは笑顔でクリスタと会っていた。そのうえであるものを見せてもらっていた。

「これなのね」

「そうなのよ。これよ」

クリスタは笑顔でバスケットの弁当箱をマトリョーシカに見せていた。

「これなのよ、マリーネ」

「そう。素敵なお弁当箱ね」

「中もよ」

クリスタは楽しそうに彼女がマリーネだと、親友だと思っている相手にその弁当箱を見せて満面の笑みになっていた。実に明るく楽しそうな笑みである。

「中也凄いから」

「そんなに凄いの？」

「ほら」

マトリョーシカの言葉に伝えて開かれたその弁当箱の中にあったのは。見事なサンドイッチであった。

「サンドイッチ・・・」

「あの人サンドイッチが大好きなのよ」

クリスタはそのこエマで笑っていた。

「とてもね」

「ハムサンドに卵サンド」

オーソドックスなサンドイッチだけではなかった。

「ハンバーグサンドにカツサンド。それにアメリカンクラブサンドね」

「あと野菜サンドもツナサンドもあるわ」

「ツナサンド？ ああ、あれね」

マトリョーシカはツナサンドと聞いてすぐに納得した顔になった。

「あの日本のサンドイッチなのね」

「そうよ。あれは確か日本でできたサンドイッチだったわね」

「そうよ」

そのことも知っているマトリョーシカだった。他の国ではツナサンドは日本の料理だと思われていたりするのである。指揮者のカルロス・クライバーも日本でツナサンドばかりを食べていたこともあるのだ。なおクライバーは和食が好きだったことでも知られている。

「それよ。それも入ってるから」

「本当ね。これは確かにツナサンドよ」

マトリョーシカはそのツナサンドを弁当の中に確かめて微笑んだ。

第五章

「これはね」

「そうでしょ。これも入れたのよ」

「あとはデザートのも物なのね」

「それはここに」

今度出してきたのは林檎だった。丸ごと一個である。

「これも持ってきたのよ」

「そうだったの」

応えながら自分の懷の中に手を入れた。そうしてあるものを弁当箱の裏に付けた。それはほんの一瞬のことだったが確かなことだった。

だがマトリョーシカは黙っていた。一切言おうとはしない。表情にもそれを出すことはなくあくまで仮面を被ってクリスタと話を続けるのだった。

「じゃあ栄養は万全ね」

「味もね」

それもだというのである。

「腕によりをかけて作ったから」

「彼氏が羨ましいわ」

こんなことも言うクリスタだった。

「そこまで尽くしてもらえるなんて」

「だって。好きだから」

こう言って頬を赤くさせるクリスタだった。

「それも当然でしょ」

「好きだからなのね」

「ええ」

また微笑んで言うクリスタだった。

「あの人は私の全てよ。だからね」

「そう」

声は微かに寂しいものになった。だがそれはほんの一瞬のことでそれをすぐに消してしまつてそのうえでまた言うマトリョーシカだった。

「そうなの。全てなの」

「そうよ。私はあの人がいるから生きていけるのよ」

こうまで言うクリスタだった。

「それにね」

「それに？」

「マリーネ、貴女もいるから」

今度は彼女に顔を向けて言ったのだった。

「だからよ。私は幸せなのよ」

「私もいるから」

「そうよ」

その純真な言葉は続く。

「私達友達よね」

「ええ」

一瞬微かに目を伏せさせて頷くマトリョーシカだった。マリーネとして。

「そうね。友達ね」

「ずっと友達よ」

また言うクリスタだった。

「ずっとね。友達でいようね」

「ええ。ずっとね」

何処か逃げ出しそうな声でまた答えるマトリョーシカだった。

「親友でいましょう」

「わかったわ」

こう言葉を返しはした。そのうえでクリスタを見送る。それから原子力発電所で大爆発が起こったのは僅か数時間後のことだった。

このことはすぐに全世界に伝わった。話を知った誰もがこう確信

した。

「あの国がやったな」

「間違いない」

証拠はない、だが確信したのである。

「核兵器開発を妨害したな」

「そのうえで自国を護ったか」

そのこと自体は誰も責めなかった。しかしだった。

「しかし。原子力発電所を爆破するとは」

「環境のことを考えているのか？」

まずこのことを指摘するのだった。

「その様なことをしては」

「恐ろしいことになるぞ」

原子力発電所に何かがあれば環境に恐ろしい影響を与えることはもう言うまでもない。彼等がそれを批判するのも当然のことだった。

「しかもあの原子力発電所には多くの民間人もいたが」

「彼等はどうなった？」

「全員死亡だ」

こう言い捨てられるのだった。

「核爆発の中で消えた」

「消えたのか」

「骨一つ残ってはいない」

まさに骨一つなのだった。誰も生き残っていなかったのだ。

「そこにテロを行い爆発させたのだろうか」

「惨い話だな」

「一般市民に何の関係がある？」

こう言って批判するのも当然だった。そもそもこうした作戦行動において一般市民を巻き込むなどということは誰であろうが嫌悪感を抱く。証拠がなくとも。

第六章

「それを巻き込んでまで」

「目的を達成するのか」

「あの国らしいといえばらしいな」

だがここでこうも言われるのだった。

「目的の為には手段を選ばない」

「全くあの国らしい」

この言葉は皮肉だった。実にはつきりとした皮肉である。

「しかも批判には耳を貸さないしな」

「あれば揉み消す」

それもするのがその国なのである。印象は最悪なのだった。

「そういう国だからな」

「言っても無駄ということか」

それはまさにその通りだった。疑惑と陰ながらの批判がこの国に繰り返される。しかしそれで動じるところは全くないのだった。

「気にすることはない」

「わかっています」

平然と上司に答えるマトリョーシカだった。今彼女は軍服を着てその上司の前にいた。今彼女は祖国に戻っているのだった。

「それは」

「ならいい。それでこそだ」

「それでこそですか」

「そうだ。パーフェクト」

彼女に対してこう告げたのだった。

「その呼び名の通りだな」

「私はただ任務を果たしただけです」

だがマトリョーシカは氷の様に冷たい声で述べただけだった。
「それだけです」

「それだけか」

「はい。我が国の安全保障の障害を除去した」
実に機械的な言葉だった。無機적입니다らある。

「それだけに過ぎません」

「そういうものか」

上司は話を聞いて少し首を傾げてから言葉を返したのだった。

「そういうものなのか」

「そうです」

また無機的な返答だった。

「それだけに過ぎません」

「それにより我が国は守られた」

「はい」

また静かに応えるマトリョーシカだった。

「そのボーナスは貴官の口座に振り込まれている」

「わかりました」

「そしてだ」

さらに言う上司だった。言葉は続く。

「君の階級もあがった」

「階級もですか」

「今回の作戦成功が認められてだ」

だからだというのである。これは軍人ならば当然のことだった。

功績を挙げればそれだけのものが与えられる。階級もそのうちの一つなのが軍なのだ。

「それによってな」

「わかりました」

ここでも無機質なマトリョーシカの返答だった。

「それでは」

「君は今日から中佐だ」

その階級が告げられた。

「少佐からだ。おめでとう」

「はい」

階級が昇進しても同じだった。その機械的で無機質な声を変えようとはしないのだった。

「了解しました」

「では暫く休暇もあるが」

「それには及びません」

休暇は断るのだった。

「返上致します」

「休暇はいいのか」

「次の任務があるのではないのでしょうか」
そしてこのことを問うてきたのである。

「ですから」

「あるにはあるが」

「ではそれに参加させて頂きます」
機械そのものの返答だった。

「それで御願います」

「よし。ではそう国防省に上奏しておく」

「御願います」

「それでな。では下がってくれ」

「はい」

最後に敬礼をして部屋を後にするマトリョーシカだった。彼女が退室してから上官は。一人になったのを確認してから苦い顔で呟くのだった。

「心はないのだな」

こう呟くのだった。

第七章

「あれだけの人間を殺してそのうえ人を騙して成功させた作戦で」
マトリョーシカがどうして作戦を成功させたのか彼も知っていた。
クリスタに身分を隠して近付き友人のふりをしたうえで爆弾を仕掛けたことも。そしてクリスタもその婚約者もその原子力発電所の爆発に巻き込まれ骨一つ残らなかったことも。全て知っているのである。

だからこそ今呟くのだった。苦い顔で。

「まさに機械だな。人ではないな」

彼にしろう思う程だった。マトリョーシカはそれからも祖国の為に様々な工作を成功させてきた。それにより各国、とりわけあの原子力発電所を破壊された国に憎まれるようになっていた。

「あの女によって」

「多くの同胞が殺された」

「様々な計画が邪魔された」

「特に原子力発電所がだ」

まずはこれなのだった。やはり。

「見ておれ」

「今に見ておれ」

憎悪に満ちた声が底に響いていた。

「必ずや目にももの見せてくれる」

「居場所を突き止めてからな」

こうして彼女の暗殺計画が進められたのだった。水面下ではあったが確かに進んでいた。そしてそれは慎重を極め誰にも気付かれなかった。マトリョーシカにも。

マトリョーシカはその日一人で酒場にいた。バーで一人酒を飲んでいたのだ。

美貌を持つ彼女に酔った若い男が声をかけた。しかしであった。

「悪いけれど間に合っているわ」

一言だった。それだけだった。

「残念だったわね」

「何だよ、おい」

何も知らない若い男はその返事に顔を顰めさせた。

「冷たい女だな」

「どうとでも言うといいわ」

そう言われても動じない様子であった。

「どうとでもね」

こう言ってから店を後にするのだった。そうして一人で夜道を歩き帰路に着いていた。その後ろからだった。

「いたな」

「ああ」

「間違いない」

幾つかの影が囁き合う。

「あの女だ」

「遂に見つけたか」

「いいな」

言葉にはかなり慎重なものがあつた。

「気付かれるなよ」

「わかっている」

「気付かれれば終わりだ」

それぞれ言い合うのだった。

「だからだ。用心してな」

「ここでは襲わずには」

「部屋だ」

一人が言った。

「部屋で仕掛ける」

「部屋か」

「あの女が部屋に入ったその時にやる」

その一人が言うのだった。

「その時にこそだ」

「わかった」

「ではそれでやろう」

他の者達も剣呑な声で彼のその提案に頷いた。

「部屋を開けたその瞬間にだな」

「一気に襲い掛かって」

「そして消す」

剣呑な言葉が続く。

「それでいいな」

「よし」

皆頷き合いそのうえで彼女を慎重に尾行し続ける。それは何とか、おそらく運も多分にあったのだろう。マトリョーシカに気付かれなかった。彼女は一人家に戻っていく。そしてマンションに入り階段を登っていく。尾行する者達はどこでも慎重に追いそのうえで。彼女が部屋の扉の鍵を開けてとところで一気に動いたのだった。

「今だっ」

「やるぞっ」

部屋を開けたその瞬間の彼女に殺到した。そしてすぐに彼女を玄関の中に押し込んだ。

それからはまさに一瞬だった。サイレンサー付きの拳銃を押し倒した彼女の胸や腹を集中的に撃った。

第八章

二人がかりで銃の弾丸の続く限り撃った。するとそれで彼女は血の海にまみれたのだった。

「これで終わったか」

「いや、安心するな」

一人が仲間達に告げた。

「止めをさす」

「それか」

「それにだ」

その一人の声が酷薄な色を帯びていた。

「俺もこの女は仕留めたい」

「そうか。そうだったな」

「御前の娘はあの原子力発電所にいたんだったな」

「ああ。こいつのせいで死んだ」

憎しみに満ちた声だった。その声を己の血の海の中で喘いでいる

マトリョーシカにかけたのである。

「こいつのせいだな」

「じゃあやれ」

「止めをさえ」

「ああ。死ね」

その憎悪に満ちた声で発砲する。彼もまたサイレンサーをその先に付けた銃だった。

マトリョーシカは胸や腹を続け様に撃たれ撃たれる度にその身体を跳ねさせる。それはさながら彼女の断末魔のようであった。

「よし、これでいい」

「もう助かることはないな」

「心臓を撃った」

今売った者の言葉だった。

「助かる筈がない」

「では。これで立ち去るとしよう」

「証拠はないな」

「うむ、何もな」

そのことを確かめ合ってから姿を消す彼等だった。後には血の海の中に横たわるマトリョーシカだけが残された。

彼女はコート姿のまま玄関に横たわっていた。だがまだ事切れてはおらず意識は残っていた。そして身体も動かすことができた。

「うう………」

血の海の中に横たわりながらもであった。何とか這って進んでいく。廊下に鮮血の溜まりを作りながらそのうえである部屋に向かった。そこは。

リビングだった。ソファーもあればテレビもある。そこに冷蔵庫やキッチンもある他は至って質素な部屋だった。味気ないと言ってもいい。

彼女は最後の力を振り絞ってその部屋に入った。目の光はまだ残っていた。

もう立ち上がることはできないがそれでも進みそのうえで。テレビを置いてある棚のところにある幾つかの写真立てを見るのだった。

「パパ、ママ………」

まずは二人並んで笑っている初老の二人の男女の写真を見た。二人は自分の後ろで彼等のそれぞれの肩を抱いて笑っているマトリョーシカに囲まれていた。

「皆………」

続いて軍服姿の一団が写っている写真に目をやった。そこには若いマトリョーシカもいた。

写真はもう一枚あった。二人の女が写っていた。一人はマトリョーシカ自身がいる。笑顔で笑っている。そしてもう一人は。彼女はそのもう一人を見て呟いた。

「クリスタ………」

これが最後の言葉だった。マトリョーシカはがくりと頭を落としそのまま動かなくなった。写真に写る彼女はどれも微笑んでいた。それはとても明るく屈託のないものだった。

マトリョーシカが死んだことはすぐに軍内に知れ渡った。だが誰もそれについて悲しむ者もいなければ悼む者もいなかった。

むしろ喜ぶ者さえいた。彼等は言うのだった。

「報いだ」

「任務とはいえ多くの一般市民を巻き込んだからだ」

「例え敵国であっても」

こう言い捨てるのだった。それはまるで機械が壊れて捨てられたかのようにであった。

「それで代わりはいるのか？」

「ああ、いる」

「もっと人間的で温かいのがいる」

「そうか。ならいい」

これで終わりであった。

「ではその後任者に頑張ってもらおう」

「あんな非道なことはせずにな」

そう言ってマトリョーシカのことを終わらせたのだった。それは彼女の上司も同じだった。

「有能だったが」

「ですがそれだけです」

彼女の直接の上司がこう国防長官に述べていた。

「人としての感情なぞ一切見られませんでした」

「私もそう思っていた」

国防長官は彼の言葉に応えて頷いた。自身の執務用の机には彼女の写真が一枚ある。だがそれを見ることもなかった。

「正直言って好きではなかった」

「左様ですか」

「暗殺されたが。それでもな」

「同情は」

「自業自得だ」

彼女を嫌う者達と全く同じ言葉であった。

「任務とはいえ一般市民を巻き込めとは私は言わなかった」

「私ものです」

「そんなことは軍人のすることではない」

ある意味において清潔な、そしてある意味においては現実がわかっていない。尚且つ無責任なものさえある言葉であった。

「私はそう思うがな」

「私ものです」

彼女の上司も謹厳な言葉で述べた。

「やがてはああなる運命でしたか」

「そういうことだな。それでだ」

長官はここでまた言った。その恰幅のいい身体の腕を振って。

「マトリョーシカ」ラムラ中佐は死んだ」

「死にましたか」

「事故死だ」

そういうことにするということだった。

「不幸な事故だったな」

「はい」

彼女の上司もその言葉に頷いた。

「全くだす」

「以上だ。それで終わりだ」

「わかりました」

「自らの結末を自ら招いた」

長官はこうも言う。マトリョーシカの写真を手に取った。そしてその写真を一瞥してすぐに。机の横にあるゴミ箱に捨ててしまったのだった。

「それだけだ。悲しむことなぞ何もない」

次の日にはマトリョーシカのことは誰も何も言わなくなった。た

だ機械が壊れて捨てられた、それだけのことだった。誰も彼女のことを知らず忌々しげに壊れたことにしてしまった。彼女の家にあった写真を見たものも心を見た者も誰もいないのだった。誰一人として。

スパイの最期

完

2009・8・23

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8779h/>

スパイの最期

2010年10月8日15時04分発行